

研究報告

## 九州地方におけるアイヌ語系地名の残存の可能性

—福岡県「志登」地名を事例として—

菊地 達夫

北翔大学短期大学部こども学科

抄 録

本研究は、九州地方におけるアイヌ語系地名の残存の可能性について、福岡県の「志登」地名を事例として、若干の考察を行うものである。具体的には、先行研究の成果を述べ、地図、景観写真、文献資料の情報をもとにアイヌ語系地名の可能性について検証した。

志登は、アイヌ語系地名の可能性が高いと考えられる。その理由として、アイヌ語説の意味となる「峰」や「舌状丘陵」の双方の可能性を含む点を挙げることができる。加えて、志登一帯は、交易地であり、他地域からの文化的要素を流入しやすい地理的環境も有していた。

他方、日本語説で考えた場合、志登は、「湿地」や「川の下流」の意味としても一致する。よって、福岡県の志登は、語源をアイヌ語説から日本語説に転化となった地名の可能性があらる。

キーワード：九州地方、アイヌ語系地名、志登、シト、舌状丘陵

## I. はじめに

現在、アイヌ語系地名の南への広がり、東北地方までとする考えが有力となっている。アイヌ語系地名の残存は、必ずしもアイヌ民族の定住地を意味するとは限らない。その地域に、アイヌ語を話す人々が定住していた可能性または縄文語に由来する言葉の残存の可能性を指すといった解釈もできる。

筆者は、拙稿で南東北地域へ、アイヌ語系地名の可能性を探り、それをアイヌ民族の生活福祉の向上に関連させ、高校地理歴史科で教材活用する授業開発を行った<sup>1)</sup>。その過程で、アイヌ語系地名の南への可能性は、東北地方以南の関東、関西、九州地方まで及ぶことがわかった。ただ、東北地方以南におけるアイヌ語系地名の残存は、関東地方の一部で確認されているものの、それ以西は確定しているとは言い難い。

東北地方以南におけるアイヌ語系地名に関する先行研究は、以下の業績が注目に値する。

清水（2002・2003）は、「シト」地名の分布についてアイヌ語の語源であるか、地図資料（地域景観）をもとに検証した。具体的には、東北地方、関東地方（栃木県・茨城県）、中部地方（静岡県）に分布するシト地名

は、そのほとんどアイヌ語の意味となる舌状丘陵もしくは峯状の地形であることを明らかにした<sup>1)</sup>。その一部の成果は、後述する。

山田（1995）のアイヌ語地名の一連の研究では、本稿の対象地とした福岡県志登について、アイヌ語系地名である可能性を示唆している。具体的には、「ドルメンの石があると聞いて志登（シト）に行った。そこは水田だが後ろに丘陵がある。北海道では、山の走り根をシトと言い、平地にそれが突き出ている辺の地名に使う」と述べている<sup>2)</sup>。

平山（2002）のアイヌ史に関する一連の研究でも、関東以西にアイヌ語系地名がある可能性を整理し、上記の山田の研究結果の一部を引用した<sup>3)</sup>。

本稿では、現在のところ、アイヌ語系地名が最も遠隔地に残ると考えられる南西の九州地方に注目した。具体的には、福岡県の「志登」を対象として、現地観察と地図資料を手がかりに、アイヌ語系地名の可能性を考察する。福岡県の「志登」の場合、前述の山田（1995）が、アイヌ語系地名の可能性を示唆しており、今回、対象として適当と考えた。また、以下では、先行研究の成果の一部を紹介しながら、東北地方以南に残存する「シト」地名の地形的な特色を浮き彫りとした上で、考察資料としても援用する。

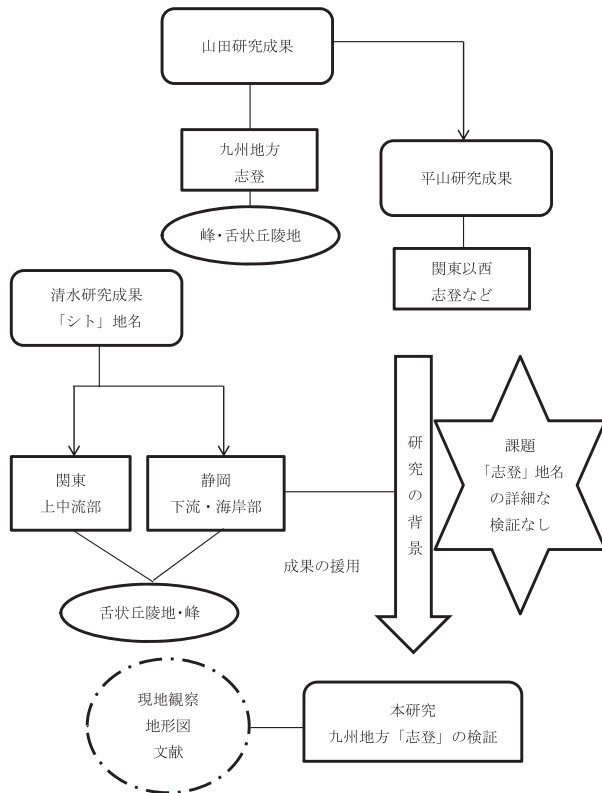


図1 本研究の枠組み

なお、現地観察と資料収集は、2014年9月に実施した。

## Ⅱ. 南限のアイヌ語系地名「シト」の分布

### 1. アイヌ語系地名「シト」の意味

知里（1956）によれば、アイヌ語系地名「シト」は、「沢と沢に挟まれた山の走り根」「本山から幾つも分かれている（支山）」「大きなみね」といった意味があることを紹介している<sup>4)</sup>。

その他の地名事典では、「湿地」「川の下流」「水口から遠い田」「水源から離れた所」などといった意味があることを紹介している<sup>5)</sup>。

ただ、清水（2002）によれば、後者の語源について、弥生系渡来人的解釈（日本語説）であり、縄文人的なそれとは異なることを指摘している<sup>6)</sup>。

### 2. 東北地方以南のアイヌ語系地名「シト」の分布

#### 1) 栃木県

本節では、清水（2002）の研究成果を手がかりに、東北地方以南のアイヌ語系地名「シト」の様子を述べる。清水（2002）では、関東地方の栃木県と中部地方の静岡県等の「シト」地名を取り上げた。ここでは、栃木・静

表1 栃木県のアイヌ語系地名「シト」

市町村名	地名
鹿沼市	志戸
鹿沼市	四戸
日光市	志戸
日光市	志渡淵
足尾町	獅戸
田沼町	志戸
今市市	四斗内
黒羽町	志戸内
葛生町	志多ノ手
那須町	志渡木
今市市	褥
芳賀町	芳志戸

資料) 清水清次郎（2002）：地名から判断されるアイヌ語シト起源の地名の分布。

岡県のアイヌ語地名「シト」の検証に触れる<sup>7)</sup>。

栃木県におけるアイヌ語地名「シト」は、県内西部に分布している。鹿沼市では、「志戸」「四戸」といった地名がある。両地名は、位置的に近い。「志戸」の場合、黒川の上流部にあり、周辺は山林に囲まれている。また、丘陵地の先端部でもある。そのことから、アイヌ語地名の可能性が高いことを示唆している。「四戸」も、「志戸」の近接地にあることから、同様の理由が該当する。とりわけ、他地域にみられる同じ表記の青森県の「四戸橋」等と同義の地形語であろうと指摘している。加えて、「志戸」と「四戸」は、近接地であり、混同を避けるため、表記を変えたのではないかと推測している。

日光市では、「志戸」「志渡淵」といった地名がある。「志戸」は、鹿沼市を流れる黒川の源流部にあたる。よって、黒川流域には、いくつかの「志戸」が存在することになる。また、市内の山久保でも、行川の源流部に「志戸」の地名がある。さらに、志渡淵川の流域に「志渡淵」の地名がある。

以上から、いずれも河川の源流部に位置し、アイヌ語系地名の可能性が高いとした。

その他では、足尾町の「獅戸」、今市市の「四斗内」、黒羽町の「志戸内」も、河川流域（上流部）の舌状丘陵地であり、アイヌ語系地名の可能性が高いことを指摘している。

葛生町の「志多ノ手」の場合、峠の名、那須町の「志渡木」は、山の名称で、二つの峰の総称であり、いずれも集落地ではないと判断した。よって、「シト」の意味には、峰を含むことから、これらの地名も、アイヌ語系地名の可能性が高いことを指摘している。

さらに、今市市の「褥」は、位置的に舌状丘陵地であり、シトが転化したものではないか、田沼町の「志戸

(現在名は紫土) や芳賀町の「芳志戸」の場合、もともとは舌状丘陵の名であったものが、後に集落名に転じたものではないか、と推測している。

以上から、栃木県には、舌状丘陵や峰を意味する「シト」が多数分布していることを明らかにした。

2) 静岡県

関東地方や中部地方におけるアイヌ語地名「シト」の分布は、河川の上中流部が大半で、下流部に少ない。他方、静岡県の場合、下流部の「シト」をいくつか確認できる。

下田市の「志戸・志戸山」は、稲生沢川の上流部に位置する。志戸山は、標高170mの山頂から西の低地に向かって伸びている舌状丘陵地である。また、志戸は、志戸山の南に位置し、川を隔てて位置する舌状丘陵地である。

志戸と志戸山のように、並列となる地名は珍しいとしている。加えて、以下のような興味深い話も紹介している。伊豆半島では、大雨時、地域住民が「川がイカマツタ」という言葉を使用していると言う。イカマツタは、アイヌ語で「水が溢れる」の意味であり、話語が残っている事実に触れている。

「志戸」は、下田市以外に、南伊豆町(湊・青市)、松崎町でも確認できる。青市の場合、志戸と志戸久保があり、前者が凸で、後者が凹の様子を表している。このような隣接地名も珍しいとしている。

松崎町の「志戸」は、山の峯を表している。修繕寺町の「倭ヶ平」も、標高305mの山の走り根の所にある。また、一帯は、支流の源流部に位置する。また、平の文字も、アイヌ語の「タイ」(樹林の意)ではないかと指摘している。

表2 静岡県のアイヌ語系地名「シト」

市町村名	地名
下田市	志戸・志戸山
南伊豆町	志戸
松崎町	志戸
松崎町	下流
修善寺町	倭ヶ平
浜松市	志都呂
金谷町	志戸呂
浜松市	志津・志津前・志津崎
掛川市	大志戸
清水市	視度
天竜市	大シダ
島田市	志太ノ腰・シダノクラ
藤枝市	志太

資料) 清水清次郎(2003): 地名から判断されるアイヌ語起源の地名考。

浜松市の「志都呂」は、浜名湖付近の丘陵の先端部に位置する。これは、「シト(舌状丘陵)オロ(その処)」で、後に転化し、「シトロ」になったのではないかと推測している。また、「下流」も同様に転化しもので、「志都呂」と同義ではないかと指摘している。

掛川市の「大志戸」は、標高154mの山の峯の斜面(舌状丘陵)の地名である。また、西日本を含む他地域に点在する「大志戸」も、その多くが舌状丘陵地であると指摘している。

清水市の「視度」は、標高633mの山の峯が伸びた地名であり、これも舌状丘陵地とした。天竜市の「大シダ」や島田市の「志太ノ腰・シダノクラ」は、シトが転

表3 アイヌ語系地名の可能性ある地名(九州地方)

凡例	地名	対象地名	所在地(県)
○	筑紫	チクシ	福岡県
○	浦志	ウラシ	福岡県
△	伊都	イト	福岡県
△	波呂	ハロ	福岡県
◎	牛	ウシ	佐賀県
◎	現川	ウツツ	長崎県
◎	薄香湾	ウス	長崎県
◎	白ノ浦	ウス	長崎県
○	仁田	ニタ	長崎県
◎	庇羅	ヒラ	長崎県
△	糸串鼻	イトクシハナ	長崎県
△	阿蘇	アソ	熊本県
○	尾足	オタル	熊本県
◎	浅海井	アサムイ	大分県
◎	白杵	ウスキ	大分県
◎	宇津々	ウツツ	大分県
◎	荒戸	アラト	大分県
△	江武戸	エムト	大分県
○	瓜生野	ウリュウ	宮崎県
◎	宇宿	ウスキ	鹿児島県
◎	平久保	ヒラ	沖縄県
◎	平得	ヒラ	沖縄県
◎	太田	オオタ	沖縄県
△	伊土郡	イト	沖縄県
○	ヒナイ川		沖縄県
△	ウブンドル		沖縄県
○	比内	ヒナイ	沖縄県
△	樽舞	タルマイ	沖縄県
◎	津波ウタバル		沖縄県
◎	ウタラ川		沖縄県

資料) 平山裕人(2002)『アイヌ史のすすめ』。

注) 凡例は、同書の分類のもの。

- ◎ 北海道・サハリン・北方領土の他に東北地方にも見え、しかも地形がアイヌ語の意味と一致している地名。
- 北海道・サハリン・北方領土の他に東北地方に見えるが、地形がアイヌ語の意味と一致していない、もともと地形を意味していない地名。
- △ 北海道・サハリン・北方領土のいずれかに見えるが、東北地方には見えない地名。



化したものであり、藤枝市の「志太」は、志戸の同義であろうと指摘している。

以上から、静岡県にも、舌状丘陵や峰を意味する「シト」が多数分布していることを明らかにした。

こうした事実から、清水は「シト」の意味について、湿地や川の下流といった日本語説に基づく語源解釈とすることを、誤りではないかと改めて強調している。

### Ⅲ. アイヌ語系地名「志登」の地域景観の検証

#### 1. 九州地方におけるアイヌ語系地名の分布

平山（2002）は、関東地方以西の中部地方、近畿地方、中国・四国地方、九州地方について、アイヌ語系地名の可能性をもつ地名について整理した。可能性をもつ地名は、以下の3つの基準で抽出した<sup>9)</sup>。

第一では、北海道（北方領土を含む）、サハリン、東北地方で確認することができ、地形がアイヌ語の意味と一致している地名（◎）。第二では、北海道（北方領土を含む）、サハリン、東北地方で確認することができるものの、地形がアイヌ語の意味と一致していない、または地形を意味しない地名（○）。第三では、北海道（北方領土を含む）、サハリンのいずれかにあるものの、東北地方では確認できない地名（△）。

アイヌ語系地名の可能性の高さでは、◎地名が優位にあるが、○地名と△地名の場合、優劣をつけにくいことを指摘している。

表3は、九州地方の可能性ある地名を示したものである。九州地方の全県に分布していることがわかる。中でも、福岡県、長崎県、大分県、沖縄県で多く、アイヌ語系地名の可能性の高い◎地名も多い。ちなみに、「志登」は、○地名の位置付けとしている。

#### 2. 「志登」の検証

##### 1) 現在の地域景観

志登は、福岡県糸島市（2010年 前原市・二丈町・志摩町が合併）の東部に属し、半島部のシマ地方と内陸部のイト地方の境界に位置する。以前は、前原市（昭和期に入り、糸島郡は、前原町（市）、二丈町、志摩町、福岡市西区の一部に分離）に属していた。また、福岡市の西部に接しており、大都市周辺地でもある。

地形的には、雷山川と瑞梅寺川に挟む扇状地（沖積地）を形成し、集落の周辺には水田地帯が広がる。糸島地方全域で見れば、志登は、下流域の低地に位置する。

志登を起点とすれば、北西には可也山（別名：筑紫富士／365m）、南東には、怡土城跡を含む高祖山（416m）をはじめ、周辺を連山が囲む。よって、志登付近は、山裾部分の丘陵地の先端部にあたる。

##### 2) 考察

本節では、日本語説とアイヌ語説の2つ観点から、志登の語源について若干の考察を行う。

前節では、現在の地域景観について述べた。志登は、中小河川である雷山川と瑞梅寺川の流域にあり、河川的位置において下流域にある。また、周辺の水田利用を考

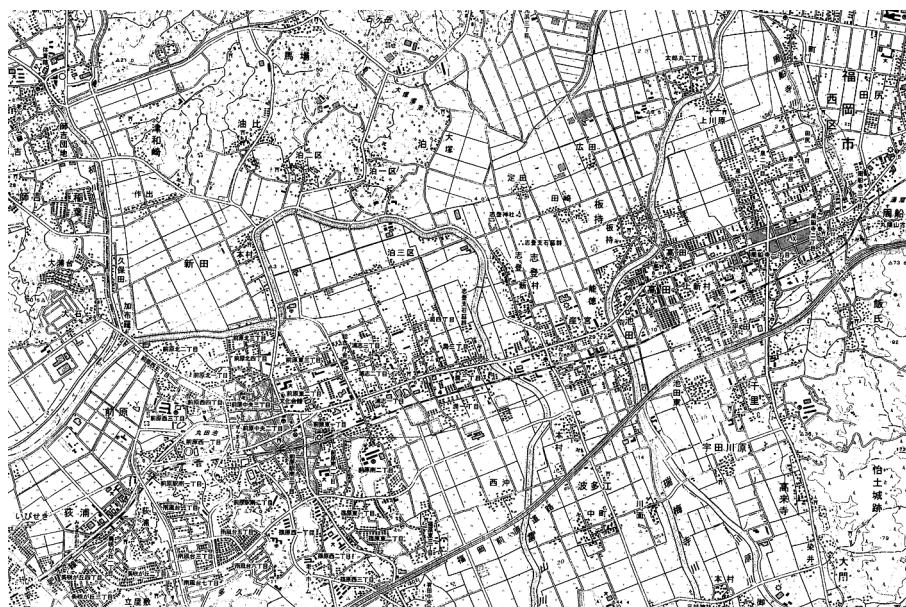


図2 現在の福岡県糸島市志登付近の様子  
資料) 国土地理院平成17年発行／2万5000分の1「前原」の一部。



写真1 志登支石墓群の様子 (2014年9月筆者撮影)



写真3 高祖山の様子 (2014年9月筆者撮影)



写真2 可也山の様子 (2014年9月筆者撮影)



写真4 雷山川の様子 (2014年9月筆者撮影)

えると、河川後背地は湿地帯であるとも判断できる。その様子から、日本語説の意味とされる「湿地」や「川の下流」といった地理的条件に一致する。

よって、現在の地域景観で判断する限り、アイヌ語系地名である可能性は低い。

それでは、アイヌ語説の可能性はないのだろうか。筆者は、以下の2点の可能性について指摘したい。

一つは、弥生時代に誕生した伊都国の活発な交流の事実である<sup>10)</sup>。伊都国の誕生時には、王都の三雲・井原を中心とし、その周辺の中核集落の一つとして志登は位置していた。また、志登には、支石墓群も造られた。この支石墓の立地は、朝鮮半島南部との交流の一部として文化的要素が伝播したものである。その証拠に、支石墓群は、糸島地方に6ヶ所分布する。伊都国は、その他に、中国との交流や九州地方、中国・四国地方、近畿地方等、広域的な交流をしていた。

この地の定住の始まりは、縄文期とされる<sup>11)</sup>。弥生時代同様、縄文期においても、交易があったかもしれない。その結果、他地域との文化的要素の往来が生じて不思議ではない。

表4 糸島地方の原始の歴史的事項

時代	歴史的事項 (文化遺産)
縄文時代	糸島地方に定住開始
弥生時代	天神山貝塚 長野宮ノ前遺跡 広田遺跡
	石崎曲り田遺跡 新町遺跡 志登支石墓群 今山遺跡
	伊都国誕生 三雲南小路王墓
	伊都国『魏志倭人伝』

資料) 糸島市立伊都国歴史博物館 (2011) : 『常設展示図録』より。

もう一つは、原始における糸島地方の地域景観の様子が、現在と異なる点である<sup>12)</sup>。当時の入江は、現在の半島部の奥深くまで流入していたことがわかっている。そ



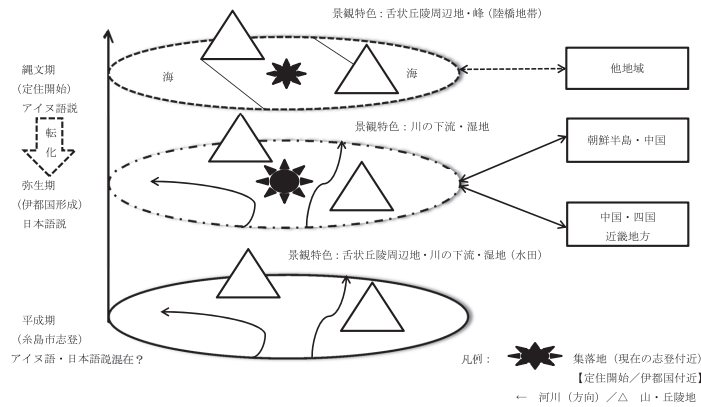


図3 志登付近における時空間の自然環境の違い(構造図)

の結果、志登付近が、半島部と内陸部とをつなぐ陸橋地帯であった。すでに述べたように、北西部と南東部の方向から舌状に丘陵地が延び、その隣接地が、志登であった。

そのように考えると、陸橋地帯は、細長い「峯」といった地形的解釈ができ、かつ舌状丘陵の隣接地といった地理的条件を有する。よって、アイヌ語説の語源となる「沢と沢に挟まれた山の走り根」や「大きなみね」といった地理的条件にも近似する。

以上から、志登の語源は、アイヌ語系地名の意味、日本語説地名の意味、双方の可能性を指摘できる。加えて、舌状丘陵の隣接地であることは、原始から現在まで、地理的条件として、ほぼ変わらない。とりわけ、志登付近は、北西と南東の山裾丘陵地の両端に挟まれるように位置する点も、興味深い。よって、志登は、アイヌ語系地名の可能性が、より高いのではないかと推測できる。

#### Ⅳ. おわりに

本稿では、九州地方におけるアイヌ語系地名の残存の可能性について、福岡県の「志登」を事例として、若干の考察を行った。その過程は、先行研究の成果を述べ、地図、景観写真、文献資料の情報をもとに、アイヌ語系地名の可能性について検証した。

その結果、志登は、アイヌ語地名の可能性が高いと考えられる。その理由として、地形的条件が大きい。すなわち、アイヌ語説となる「峯」や「舌状丘陵」の意味の双方の可能性を含む点を挙げることができる。加えて、この地は、交易地であり、他地域からの文化的要素が流入しやすい地理的環境を有していた。

他方、日本語説で考えた場合、志登は、「湿地」や「川の下流」の意味としても一致する。よって、福岡県の志登は、語源をアイヌ語説から日本語説に転化となった地名の可能性がある(図3)。

今後の課題は、縄文期の調査地における地理的環境の

復元による正確な地形の検証である。志登付近の微細地形の様子がわかることで、検討の精度が増す。機会をみて、継続研究をしていきたい。

#### 付記

本研究では、2014年度北方圏学術情報センター研究費(生活福祉研究部)を使用した。

#### 注

注<sup>1)</sup> 菊地達夫：アイヌ語系地名の南限と地歴教材開発の可能性，北方圏学術情報センター年報第6号，pp.7-14 (2014)。

#### 引用文献

- 1) 清水清次郎：地名から判断されるアイヌ語シト起源の地名の分布，アイヌ語地名研究5，pp.79-112(2002)，清水清次郎：地形から判断されるアイヌ語起源の地名考，アイヌ語地名研究6，pp61-76 (2003)。
- 2) 山田秀三：『アイヌ語地名の研究1』，草風館，pp.93-96 (1995)。
- 3) 平山裕人：『アイヌ史のすすめ』，北海道出版企画センター，pp.250-254 (2002)。
- 4) 知里真志保：『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター，p.125 (1956)。
- 5) 清水清次郎：地形から判断されるアイヌ語起源の地名考，アイヌ語地名研究6，pp61-76 (2003)。
- 6) 前掲書5)
- 7) 清水清次郎：地名から判断されるアイヌ語シト起源の地名の分布，アイヌ語地名研究5，pp.79-112(2002)。
- 8) 前掲書5)
- 9) 前掲書3)
- 10) 糸島市立伊都国歴史博物館：『常設展示図録』，pp.8-33 (2011)。
- 11) 前掲書10)
- 12) 前掲書10)